

【声明】 日本学術会議会員候補の任命拒否 に抗議し、撤回を求める

文芸教育研究協議会全国委員会 2020.10.6

日本学術会議は、戦時下の科学者の戦争協力、ファシズム翼賛体制を支えたという深い反省から設立され、憲法 23 条「学問の自由」から導かれる同会議の独立性・自律性を政府も歴代首相も認めてきた。日本学術会議・会員も学術の発展に大きな役割を果たし、結果として文化国家建設のため、ひいては国民の利益に寄与してきた。

今回の菅首相による政府の意向と異なる者を排除する任命拒否は、従来の政府・歴代首相見解の変更に止まらず、学術研究の独立性と憲法の保障する「学問の自由」「思想・信条の自由」を否定する行為であり、大学およびすべての研究機関にとって座視するわけにはいかない。憲法の根幹にかかわる事項を、先の「安保法制」に続き、時の権力者が恣意的に解釈を変更する暴挙がまかり通れば、法治国家・民主主義社会の破壊につながるのは必至である。

「前例主義を見直す」「会員は国家公務員だから任命権は政府にある」「総合的・俯瞰的に判断」などの理由付けは論点ずらしの詭弁であり、問題の核心は「学問の自由」を尊重し、遵守するかどうかである。

私たちは、10 月 2 日同会議が出した撤回を求める要望書と行動を支持する。菅首相に対し、憲法と日本学術会議法に基づき速やかに 6 名の任命をおこなうことを強く求める。

事務局通信	各地からの報告	巻頭 上西委員長より	目次
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
22	7	1	

鈍麻させられている平和への

嗅覚を研ぎ澄ませたい

「国民の不断の努力」(憲法十二条)の

保持義務の重さ

上西信夫(文芸研委員長)

▼この「声明」を出した時点から二ヶ月が経過し、

国会論戦を通してこの問題の本質がより鮮明に炙り出されてきた。二転三転どころか四転五転する首相答弁には啞然とするが、何より野党議員の質問に正対しない国会軽視の姿勢に憤りを感じる。「今回の問題の本質は、時の権力が『何が正しく、何が間違っているかを決めている』点において、ガリレオ裁判と変わらない」（イタリア学会の「声明」）ということであり、「任命拒否の理由を菅首相がともに説明しようとせず、あたかも何事かを答えたかのように見せかけている分だけ、ただの黙殺より悪質だとも言わなくてはならない。前政権以来、この国の指導者たちの日本語破壊が目余る。（「沖縄県民・被爆者に寄り添う」「真摯に」など）見せかけの形式に空疎な内容を盛り込んだ言説が今後も横行するなら、日本語そのものの力が低下してしまう」（上代文学会の「声明」）ことへの批判である。

今回の問題は、政権の恣意的な（ある意味確信犯的な）任命拒否にあるのに、批判の矛先を相手・学会協議側に向け責任転嫁し、学会協議のあり方を考えたいと言い出し、世間にもそう思わせる論点ずらしが甚だしい。「いじめ」やセクハラされる側にも問題がある式の抗弁と同

様である。

今回の任命拒否問題は、戦前の滝川幸辰（京大）事件、帝大騒動や美濃部達吉の「天皇機関説」排撃や津田左右吉の「古事記」「日本書紀」研究が国家権力によって弾圧された受難の歴史を想起させる。また「戦後（1949～50年）一万人を職場から追放したレッドパージの構造と酷似している。今論じなければならぬのは『権力者』が公然とパージを始めたという一事である。菅政権は安倍政治の延長どころか、ファシズム的な方向に一步進める内閣だ」（保坂正康、作家・評論家、「世界」十二月号）。きつと教育の分野でもあからさまな異端狩り（パージ）に近い将来突きつけられてくるだろう。

国権の最高機関と習えどもそこに響くは壊れた言葉（福岡市 田中ゆかり）

六人の任命拒否のその後は過去の歴史が教えてくれる（亀岡市 俣野右内）

段々に馴れて来ますと親しげにすり寄ってくる名はファシズム（我孫子市 松村幸一）

『民主主義の死に方』*なる本を読む今起きていると身震いせり（千曲市 米澤光人） *ステイプ

ン・レビッキ―他 新潮社 2018 |「朝日歌壇」より

▼「日本学術会議任命拒否問題」は憲法の基本的人権条項の原則を否定し、法治国家から人治国家へと民主主義そのものを否定する暴挙にもかかわらず、世論の反応はモリ・カケ・サクラ疑惑のときほどではない。まだ菅内閣の支持率は一〇ポイント急落したとはいえ五〇%を維持している。その原因は、テレビやネットメディアに溢れるデマゴーグたちのフェイクである。フジテレビの平井文夫上席解説委員、甘利明元大臣、下村博文元文科大臣、伊吹文明自民党国会議員、橋下徹元大阪市長、河野太郎行革担当大臣、杉田水脈自民党国会議員、上念司加計学園教授……右派論客と言われている菅内閣応援団の輩——曲学阿世の徒の虚言が垂れ流されていることと、「どうせ学者の世界の話だ」「学術会議は税金の無駄遣いでは」という多くの国民の気分がある。「滝川事件や天皇機関説のときも多くの国民は無関心だった。しかし、気づいたときには、異論が言えない社会になっていた。今、ここで政権のやり方を許してしまえば、政治の介入を広げる大義名分を与えてしまいかねない」（古川隆久、日大教授・近現代史専攻、「朝日」11.19）のだ。

▼学術会議任命拒否問題のそもそも論——戦後なぜ学術会議が設立され、一貫して科学技術の軍事利用に反対してきたか、「思想・信条の自由」「表現の自由」の他に「学問の自由」が憲法に書き込まれているのはなぜか。戦争に繋がる自由への侵害が私たちの周りで頻繁に起こっている昨今（あいちトリエンナーレ「表現の不自由展・その後」への攻撃と補助金カット、安倍前首相の札幌での選挙応援演説へヤジを飛ばした者への警察による排除、戦争・平和や核、ジェンダーをテーマにした会場使用を認めない自治体の増加等）、鋭敏な危険察知能力、鈍麻させられている平和への嗅覚を研ぎ澄ませたい。「……そして彼らが私を攻撃したとき、私のために声をあげる人は一人もいなかった」（マルティン・ニーメラー・ドイツ・神学者）にならぬように。

ナチスが最初共産主義者を攻撃したとき、私は声をあげなかった

私は共産主義者ではなかったから

社会民主主義者が牢獄に入れられたとき、私は声をあげなかった

私は労働組合員ではなかったから

そして、彼らが私を攻撃したとき、私のために声をあげる者は、誰一人残っていないかった
(マルティン・ニーメラー)

あなたじゃない拒否されたのは民主主義だ 欠け
ゆく月が日本を照らす

(松山市 岡本秀美／「朝日歌壇」)

▼安里要江(あさととしえ)さんが亡くなったとの死亡記事(「朝日」二・一〇/九九歳歿)に接した。「沖縄戦 ある母の記録」(高文研)の原作者、映画「GAMA 月桃の花」のモデルでもある。太平洋戦争末期の沖縄戦で二人の子どもや夫、母親ら親族十一人を失った。沖縄戦の実相を伝える最高齢の語り部として、昨年五月まで活動が続けていたと記事には書いてあった。(辺野古基地反対の闘いに参加しながら)現役時、担任学級に安里さんの孫のN子が在籍しており、母親を介して上京の折に勤務校に来ていただき、六年の子どもたちや保護者に沖縄戦の体験を語っていただいた。圧倒的な内容で三〇年経った今でも安里さんの語りをまざまざと思い出すことができる。また次の勤務校では、長崎で被爆した松戸

市在住のMさんをゲストティーチャーとして招き、核兵器の非人間性や平和への思いを語っていただいた。六年都内見学では、新木場・夢の島の「第五福竜丸展示館」を見学コースに組み、元乗組員で生存者の大石又七さんの話を聞くこともできた。「命どう宝」「安らかに眠って下さい 過ちは繰り返しませぬから」「教え子を再び戦場に送らない」「沖縄や核、戦争と平和の問題を教材化することは外せない教育内容として学校現場で共有できた頃のことである。

▼学術会議任命拒否問題を私たちにひきつければ、教育実践の問題として繋がってくる。

憲法十二条は「この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によつて、これを保持しなければならない」と保持義務を謳っている。権利・自由は行使してこそ生かされるし、実践していくことで守らなければならない。教室・学校・地域で国民主権・戦争放棄・基本的人権の尊重の憲法三原則を血肉化していくことである。「チーム学校」や「スタンダード」など新手の管理で教育現場の隅々にまで統制・管理が広がり、実践の自由度が低くなっている現状だが、変革主体・主権者を育てる「不断の努力」に値する実践を創り上げていきたいし、

変革主体を育てる文芸教育はその一端を担っていると思っている。

さらに任命拒否の六名が人文・社会科学研究者であることの意味と大学の人文・社会科学の再編・統制、高校国語科教育の再編、文芸教育の軽視と通底していると思われる。政権が作りたいのは批判精神抜き政権の意向を付度する人文・社会科学系の御用学者なのだ。

▼散歩がてら蘆花恒春園近くの世田谷文学館の「没後一〇年 井上ひさし展―希望へ橋渡しする人」に出かけてきた。「絶望するには、いい人が多すぎる。希望を持つには、悪いやつが多すぎる。なにか綱のようなものをついで、絶望から希望へ橋渡しする人がいないものだろうか……いやいいことはない。」（ひさしさん最後の戯曲『組曲虐殺』の多喜二の台詞）少なくとも私たちは、子どもたちに希望を示し、希望を語る教師であり続けたい。西郷先生が私たちにしてくれたように。

▼一月二七日（日）初めてのオンライン実践研が行われる。第三波そして、今後も予想される四波、五波…の現状を考えると従来の対面方式を追求しつつ、オンライン方式での学習会や会議も併せて準備する必要がある。民教連加盟の各団体もオンラインでの学習会を定例化し様々な工夫をしている。今後の実践研や大

会もハイブリッド（対面とオンライン併用）形式やオンライン方式にすることが現実的な対応かと思う。安全な日が来るまで何もしないでいると、運動は停滞し、組織は弱体化してしまう。私のようにPCに不慣れな者も、周囲の若者に手助けしてもらってオンライン学習会や会議に参加できるようにしてほしい。ツイッターやLINEをやっている会員は学習会のことを拡散し、HPまでそして学習会・「文芸教育」誌へ若いシンパ層を案内してほしい。

▼「文芸教育」122号が刊行された。特集は〈文芸教育は「役に立たない」のか〉山中吾郎論文はじめ、倉富寿史「スーホの白い馬」・吉田剛人「モチモチの木」・松山幸路「大造じいさんとガン」の三報告。三学期教材の小特集―奥葉子「ずうっと、ずっと、大すきだよ」、辻村禎夫「初雪のふる日」、佐々木智治「海の命」。連載―村尾聡〈ものの見方・考え方〉リレー連載③、林三十四「教室に詩をいっばい」②、高橋睦子「文芸研で学んだからこそ見えたもの」②と今号も充実した内容になっている。全サークル員が先頭になって周囲に広げてほしい。

▼林竜一郎著『おてつちき 鹿児島おはら節』刊行！『かごしま ふるさとカルタ』に続き、地域に根ざした教育を進める林三十四さん（かごしま文芸研）による上記の本が上梓された。民衆の底力に光を当

てたどつしりと、しかし軽妙な、林さんの人間味が彷彿される本になっている。定価二〇〇〇円。注文は近くの書店か、「地方・小出版流通センター」FAX 03—3235—6182または「国分進行堂」FAX 0995—46—4296 まで。

▼昨年も「文芸研ニュース」No.152で青梅市立第七小学校のことを書いたが（「小さな学校の確かな歩み」）、校内研通年講師の声をかけていただいて四年が経つ。十一月二十五日今年最後の校内研が終わった。コロナ禍の今年も例年通り五回の授業研を実施した。各学年十名前後の小規模校だからこそ密にならない利点を生かしての校内研修である。今年は「たぬきの糸車」「動物園のじゅうい」「まいごのかぎ」「ごんぎつね」「たずねびと」「帰り道」の授業展開。光村新教材の三本はじめ全員が新たな教材に挑んでいる。復刊された「文芸研新国語教育事典」を全員が購入してくれるほど研究熱心な学校であり、私もその熱量に圧倒されつついつい話に熱が入る。「働き方改革」に逆行して申し訳ないと思いつつ、研究協議後も暗くなるまで話し込むことが毎度である。校長先生が子どもファーストで実のある研究を学校経営の中心に据え、教職員も天体・野鳥・伝統芸能：それぞれの持ち味・特技を生かした個性が際立つ集団である。前回にも触れたが文芸研や数教協など、民間教育研究団体の実践に学

び続ける学校である。全学年単学級ゆえ、事前の模擬授業で授業展開を全員で構想し研究授業に臨む。お座なりでない校内研究を通した学び合いが見事である。小規模校ゆえ統廃合の噂もあるとのことだが、この小さな学校の共同研究の灯をいつまでも北多摩の地で灯し続けてほしい。

▼「作文と教育」誌（日本作文の会編）に三回にわたって拙稿が連載された。（八・九月号「コロナ時代と国語科教育の課題」、十・十一月号「たしかな日本語の担い手を育てる」、十二・一月号「美と真実を求めて―確かさをふまえた、豊かで深い読み」）「文芸研ニュース」や「文芸教育」誌、「大会基調提案」に書いたものをまとめたものだが、機会があればお読みいただきたい。

▼コロナ禍の中で、西郷竹彦生誕百年の二〇二〇年が終わろうとしている。二一年こそ第五五回文芸研山口大会の開催をはじめ、文芸研運動を前へ進めていく年にしたい。私の住む世田谷区は感染者数が三〇〇〇人を超えた。毎日の家呑みで消毒は万全である。巨人を撃破し、ホークスの四連覇は痛快であった。（杉浦・野村時代からのアンチ巨人の南海ホークスファンである）その上今年は柿の表年とのことで、郷里和歌山県・九度山産の富有柿を鱈腹いただいたいき免疫力を高めている。会員諸氏の健康を専一に祈念する。

各サークルからの近況報告

三密避けても心は密に・

距離をとつても心は側に

津軽サークル・高田美貴子

この春、久々の異動により、山間の小さな学校に赴任しました。本校の子どもたちは、片道二キロ以上ある緩い坂道を上って、熊除けの鈴を鳴らしながら集団登校してきます。

春休み中の登校日、いよいよ子どもたちとの初顔合わせというのに、朝から結構な雪が降っていました。（こんな日でも、子どもたちは歩いてくるのかな。）と思いながら車で学校へ向かっていると、傘をさしながら一列になって歩いている子どもたちの姿が見えたのです。（ああ、歩いて来てるよ。なんて健気なんだろう。）と思い、スピードを落としながら横を通りかかると、子どもたちが立ち止まってこちらに向きを変えたのです。すると、傘を後ろに傾けて、皆で揃って丁寧に会釈をしたではありませんか。その姿にわたしは胸を打たれ、一瞬にして愛おしさが込み上げてきたのを今でもはっきりと覚え

ています。と同時に、担任としての使命感や責任感を、より一層強くしたものでした。

ところが、その日から四日でコロナによる休業となつてしまい、子どもたちと一ヶ月以上も会えない状況になりました。慌ててその間の宿題プリントを準備したとき、裏に日記を書けるようにしました。ただただ、休み中でも子どもたちとつながりたい、という思いでした。「ヒマだあ。」などと気持ちを吐き出してもいいし、書きたいときに書けばいいとだけ伝えました。

それからしばらくして、学校内の児童クラブに顔を出していた子が、「先生に書いた。」と、恥ずかしそうに日記を見せにきたのです。

たかだ先生たんじょうびおめでとう

四月十六日は、高田先生のたんじょうびです。

ことは、コロナウイルスのせいで、高田先生に、あうことも、すくなくなりました。そこで、わたしからプレゼントがあります。先生が四・五年たんに

んになったとき、いちばんさいしょにやったやつです。

まえば、じぶんのことをかいていたけど、こんどは、わたしからみて、先生のことをかきたいと思います。

た たんじょうび

か かんぱい！

だ だいすき

み みんなのことを考えている

き きもちがわかる

こ ことばがわかりやすい

これがプレゼントです。

松井さんの夏みかんではありませんが、あまりに嬉しくて他の先生方にも日記を見せたのです。すると、

「○○さんが自分から誰かとかかわろうと、そのような文章を書いてくるなんてビックリだ。」
と言われました。この日記は、わたしの宝物になっただけでなく、『最初の出会いは肝心だ』ということに、改めて気付かせてくれました。

あれから八ヶ月。未だにマスク、ソーシャルディスタンス生活ですが、常に心掛けてきたことは、『三密避けても心は密に・距離をとっても心は側に』です。コロナ渦でも変わらないことは、子どもたちにいかに寄り添った教育をするかだと思っています。会えない日があっても、マスクで顔が隠れていても、

握手やハイタッチなどができなくても、子どもたちと心を通わせる時間を過ごすことです。そして、ねらいを明確にして授業に取り組んでいくことで、子どもたちは健やかに成長していけると信じて、日々励んでいます。



松戸サークル近況報告

「久しぶりに行った”リアル”例会」

松戸サークル 秋山亮介

感染拡大の時期から、東京都をはじめとする関東地方は、新型コロナウイルスには他地域よりも特に敏感になっている。千葉県松戸市、我孫子市、柏市などの市でも、児童の感染・休校の情報は毎日のようにあった。その中でも、松戸サークルとしてサークル例会と、毎月の国語の教室は行ってきた。どちらもZOOMでの開催である。

しかし、10月辺りには、コロナの感染も一時落ち着いてきたので、例会を半年以上ぶりの”リアル”開催で行った。5人という少人数だからこそこそできるというのもあるが、それでも広い部屋で、密にならないように行った。その時の学習は、教育出版社3年の新教材「川をさかのぼる知恵」。加藤憲一先生も来てくださり、教材分析をした。教材に対する批判的な分析になったが新教材の分析は、新しい発見が多くとても楽しかった。私は、説明文「はたらくじどう車」という説明文の学習で悩んでいたところだったので、子どもたちのノートを持っていき、アドバイスもいただけた。

久しぶりに会えた喜びと共に、実物を見せられることで対面での学習の良さを実感することができた。

そして今、第三波の真っ只中。またリアル行うことが難しい状況になってしまった。コロナ前から行っている国語の教室は、ひとつの教材を辻先生や曽根先生が講師となって、オンライン開催している。

この国語の教室に、県内の先生が常連となってくれていて、毎月参加してきてくれている。また、先生ポータルから申し込んでくれる方も含めて、10人ほどで学習している。参加者には若い先生も参加しており、「深く読むことの楽しさを実感した。」とか、「自分も気づかないところがたくさんあった。子どもたちと、この『面白さ』を共有したい。」といった感想を話してくれた。

学校現場では、コロナ禍の中で子どもも教員も息苦しい思いをしていることも多い。しかし、現場でもコロナ禍でなければできなかった思い出づくりもあったし、教員の行事の精選や学習内容の見直しなどは、コロナ禍でなければできなかったことかもしれない。

今、松戸サークルは、主としてオンラインでの学習となっている。そこでは、コロナ前では出会えなかった人たちと共に学習することもある。そういったことは、コロナ禍の中でもひとついいことがあるのだと思っている。

民教連交流集会に参加して

東京サークル 西真由子

十二月十二日(土)、大塚の東京労働会館ラパスホールにて、第三十四回日本民教連交流研究集会が開催された。コロナ禍とあって、例年よりも規模を縮小し、オンライン併用ハイブリッド型での開催となった。また、提案レポートも二本に絞られ、中学校音楽の授業実践と私の絵本の実践との報告となった。今年度コロナ禍において、主要四教科以外の、特に芸術分野の授業などはその重要性が軽視されることも少なくなかった中で、それらが子ども達にもたらず豊かさについて、再認識されたように思う。

全体講演は法政大学教授の児美川孝一郎氏による「子どもに学校をとりもどす」コロナ禍に便乗する「教育改革」に抗して」。経産省による教育界への参入、子ども達の教育の機会と場が“金づる”になっている現状について語られた。

私は初めこの講演の中で「個別最適」に対する批判については、違和感を感じていた。私が絵本を用いて授業を行う理由の一つにも、授業に参加しづらい子への個別対応という側面があったり、同一単一レベルの宿題に苦しむ児童への個別課題の提示、板

書が困難な児童への板書写真の提供など、個の特性に対して行う支援をこそ「個別最適」と捉えていたからである。つまり、子ども達の「学び」を第一に考えたとき、その手段としてICTの活用や個別対応がなされることは必要支援なのである。しかし今回児美川氏が指摘していた「個別最適」とは、はなから「個別」という形式が目的であって、「何のために」が置いてきぼりになってしまっていること、子ども達一人一人の顔を思い浮かべずに形やアイテムだけに飛びつくことには、用心と批判とが必要だ、という訴えであったのだと受け取った。

今後ICTは私たちの暮らしにごくごく普通に存在し、今よりももっと普及していくものであり、切り離して生活していくという過去への遡りはない。だからこそ、教師も“わからない”“知らない”ではなく、積極的に吸収していき、子ども達にとっての必要支援になりえるものなのかどうか、主体的に取捨選択をしていくことが求められるのではないかと思う。間違っても「教育」という子ども達の学ぶ権利の場が、「経済」というフアクターでものを見る者達から経済市場として食い荒らされることがあってはならないと感じた。

児美川氏は、教育内容の市場化・民営化に伴い、学校教育の内容にかかわる全てが、企業の商品とし

て開発提示され、組み込まれていくこと：例えば、公立高校も含めた授業面での塾・予備校との連携、学習診断テストや教材・進路情報の提供などの動きが加速・拡張されていくであろう、予測される未来について「公教育が溶解する」と警鐘を鳴らされていた。

三月で退職した私だが、十一月の下旬に療休代替の中継ぎとして、数日、元職場へ出向き、久しぶりの子ども達の様子を見て、子ども達にとつての「学校」が、どんなに重要な場所なのかということに改めて気付かされた。休み時間の友達との関わり、意見交換をすることで深まる授業、できないことがあった時にクラスメイトから投げかけられる励まし、時におこるケンカから学ぶ対人関係やコミュニケーション、それらがもたらす豊かな感情：「学校」という箱が大切なのではなく、そこで関わる人との間で育まれ、形成される自己概念。まさに、学校は人間教育の場なのだという実感を、子ども達の弾けんばかりの笑顔から感じたのである。

憲法に基づく学校教育は、一人ひとりの人格の形成・社会の担い手となる主権者の育成こそが目的である。決して、企業社会が期待する人材の育成の方に、子ども達が「最適化」されていくことがあってはならない。



教室に集う

相模サークル 松野真帆

私が務める私学の小学校では、四・五月が休校、六・七月は分散登校の対応が取られました。休校期間にはオンライン学習を行い、機器をいじるのはあまり得意でない私も動画撮影、編集、サイトへのアップなどに否応なく慣らされていきました。しかし、動画配信型のオンライン授業では、当然ながら子どもたちの顔が見えません。私の担任する一年生に至っては、まだ入学前で一人ひとりの顔もわからない状況で、動画を作ることに虚しさもありました。雑音が入らないよう自宅で夜中に一人で授業動画を撮影し、子どもたちが盛り上がってくれるはずの話をしてみても、どう受け止められているのか不安ばかりの二カ月でした。

やっと学校に登校できるようになってからも、分散登校のうちは、子どもたちも様子見だったようです。入学直後ということももちろんありますが、人数が半分になったクラスは妙に静かで、子どもたちは落ち着いて授業を受けているように見えました。そんな様子を見て、今年の子たちは大人しいなあ、

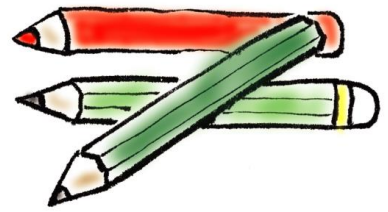
いい子すぎるぐらいでちよつと物足りないなあなんて思っていたのです。

ところがどっこい、夏休み明け、クラス全員（四十人！）そろつての授業になってみると、こちらも笑ってしまうぐらい子どもたちの活気が爆発しました。なあんだ、ちつとも大人しいだけの子たちじゃなかった、となんだかほつとしました。授業でも子どもたちは発言したくてたまらず、特に読解の授業での変貌ぶりは見違えるほどです。子どもが教室に集い、お互いに刺激し合つて学びを深めていくことがこんなにも貴重でありがたいことだったのかと身に染みて感じます。

今では、休み時間の鬼ごっこもけんかも日記も掃除も復活。時間が足りないぐらいたくさんのに追われる忙しい日常が戻ってきました。未だ短縮授業（一コマ四十分）で時間数が足りないのは否めないのですが、詰め込みではなく、子どもたちの深い学びにつながる授業を模索して授業づくりにあたる日々です。

個人としては、全国大会がなく、全国の先生方と直接お話しできないことがとても寂しいです。オンラインでの研修にも参加しておらず、この状況でも学習会に参加されている先生方を見習わなくてはと思います。

子どもたちが集う教室で、私の方がいろいろ教えてもらいながら国語の難しさと楽しさを味わっています。再び状況が悪化していますが、子どもたちが輝く双方の学習の機会が失われないよう願っています。



通級指導教室を担当している目を通した

コロナ禍の学校

豊中サークル 市川陽子

私は、豊中市で通級指導教室の担当になって四年目になります。対人関係や行動面、学習面が中心となる子どもたちや、言語の課題が中心となる子どもたちが、自校から九人、他校から十八人、通っています。

通級指導教室での新型コロナウイルス感染症対策

は、基本的には、学校のものと同じです。児童は、保護者付き添いのもと放課後に通って来ていますので、教室に入る前に、手洗い、検温（自宅での検温と「健康チェックシート」の記入は済ませているはずですが）を行っています。教室内での換気（十二月後半に差し掛かった今でも、大阪では暖房を付けていれば、窓を空け寒さに耐えられます）、マスクの着用を行っています。

言語指導が中心ですので、言語指導中は口の中や舌の動き、呼吸の流れを見ますので、子どもにもマスクを外してもらいます。教室では、手作り仕切り版（ラミネートシートを貼り合わせたもの）を机で挟んで指導を行います。舌を舌圧子などで触る場合は、こちらがフェイスシールドを着着して指導にあたっています。子どもが口の中を触った場合はその都度手洗いを行っています。又、指導する児童が教室を退室して入れ替わる度に、机などの消毒を行っています。豊中市でもあちこちで感染者が増える中、日々怠ることなく感染予防に努めることの大切さを実感しています。

通級指導担当者は市の支援事業にある、巡回相談にも出向くことがあります。学校や担任、支援担からの、子どもについての相談です。相談内容には、

以下の相談が多いです。「授業中に立ち歩き教室から出ていく。課題に取り組むのに時間がかかる。黒板の字は見えるがノートに書けない。一斉指導が入りにくい。休み時間に一人で過ごすことが多い。自分の意見を通そうとする。友達や先生に手が出る。物の整理ができない。」

コロナ禍になり、様々な行事が削減・圧縮される中で、今年の学校の流れに必死に合わせて頑張ってきてくれた子どもたち。自力をつけて伸びている子、黙々と目の前のことに全力で取り組み頑張っている子たちの姿もあります。その中でも、徐々に、二期に入って子どもの抱えるしんどさが蓄積して子ども一人一人の器に限界が来て、水が器から染み出すような、雪崩ていくような実態があります。

又、コロナ禍において、不登校になる子どもたちが十一月を過ぎて更に増しているように感じます。はつきり「これが嫌」という原因がなくても足が学校に向かなくなっている子どもたちもいます。コロナ禍の子どもたちには無理をさせ我慢をさせてきたしわ寄せを、ここに感じずにはおられません。

私のところにも、「感覚が繊細で学校に行きにくくなって」とおっしゃる親御さんからの問い合わせがありました。通級指導教室のホームページを見て教育相談に来て頂きました。そこから週一回、通つ

て来るようになりました。親御さんは、始めはどこかに居場所を求め、先生に子どもの指導に関わってもらいたいと願っていて、指導日の事前事後の電話など、すぎるような気持ちで来られているように感じました。今は少しずつ安心感を持って指導日を迎えてくれています。

豊中市教育委員会児童生徒課教育相談係の道下伊津子さんからの研修で、

「まずは先生が元気になること。

休める時にはしっかりと休んで持続的に子どものケアにあたることができるように自分自身を整えましょう。一人で抱え込まず周囲と協力すること。心配や不安を感じたら身近な人に話しましょう。

安心できる関わり、声かけを。

ストレス反応の表れ方は人それぞれです。ストレスを抱える子どものあり方を、そのまま受け止め周りの大人が安心安全を守ってくれていること、話したい気持ちになったら聞く準備があることを伝えると良いでしょう。」

ということを教えて頂きました。これは七月に聞いていた話ですが、今、この言葉が心に響き、自分の今持っている肩の荷をおろしてくれるような思いがしました。毎日、忙殺され、消毒作業や給食指導

に神経質になり、叫びたくなるほどイライラすることもありますが、同僚と話して発散したりしながら自分の限界を越えずにコロナと付き合っていこうと思います。

豊中サークルでは、なかなか同じ空間に顔を突き合わせて会うことはできませんが、ZOOMやライン電話で、教材分析について話すこともあります。サークルでできることを継続していくことの大切さを感じます。私自身は、丸九年、小学校担任はしていませんが、サークル員の話から学級の様子を想像したり、いつか担任に戻った時の自分のクラスのことも妄想しながらのサークル活動は、チャンネルを切り替えて取り組みますし、毎回発見の見つかる、ありがたい場があります。これからも自分たちのペースですが、続けていきたいと思っています。



バーベキューに始まって

枚方サークル 大西朱夏

11月3日（火・祝）に、野澤先生の隠れ家に集合し、バーベキューをしました。

大人7名、子ども6名の計13名で行いました。ブロックを並べて、重ねて、網をのせるまでは良かったのですが、火おこしに大苦戦：（笑）やっと火がついたら、智子先生が準備してくださった食材をどんどん焼いていきます。お肉は焼けたら、一瞬で子どもたちのお腹の中へ。大人たちも学校の様子などを交流しながら、楽しく食べました。最後には、お正月についた餅を薄く切ったものを焼いて、せんべいを作ります。これがとても美味しい！醤油をつけて二度焼きすると、さらに美味しくなつて、食べるのが止まりませんでした。

そのあとは、冷えてきたので片付けをしてから家の中で交流タイム。私が次週に校内研究授業（世界一美しいぼくの村）を控えていたので、相談（ほぼ愚痴？）をしました。年3回の研究授業のうち、教育委員会が指導・助言に来る1回に私の授業が当たってしまい、事前に指導案検討をしたのですが、それがあまりにも酷く、怒りが収まりませんでした。

「子どもたちの主体的な学びを引き出すために、言語活動（単元のゴール）を設定すべきだ。それは、「物語の紹介カードを作ろう」が良い。」「単元計画は子どもたちと作るべきだ」「教材を深く読み込む必要はない。子どもたちは1回読めば、話の内容は理解できる。理解できないのであれば、今までの授業・指導に問題がある。」「この教材を使って、つける力は『終わり方を考えよう』であるから、そこに時間を取れば良い。」などなど……

カードを作るというゴールを示すことが、本当の主体的な学びにつながるのか？人参（カードを作ること）をぶら下げて頑張らせるのが、本当の主体的なのか？ 本当の主体的な学びとは、教材を読み進めていくうちに、もっと知りたい！と思って調べようとする姿勢だと思います。

教材を深く読み込まずに、物語の終わりについて考えることはできるのか？特に「世界一美しいぼくの村」では、最後の一文の意味を考えると、今までのヤモの村に対する思いを積み重ねていかなければ、「破壊」は物理的な破壊だけでなく、思いや人間関係をも破壊することに気づけないと思います。今までの思いの積み重ねがあるからこそ、戦争の悲惨さを強く感じるだけでなく、人の思いの強さを感じることができると思うのです。

文学作品の視点人物に共体験することで作品を楽しむだけでなく、典型化をすることで、自分の生き方・考え方を見つめ直すことができます。それが、豊かな人生につながると 생각합니다。漢字を覚える、文章を読むなどの身につけさせたい力を教えることは大切だと思いますが、感じたことを交流し、ほかの考えを聞いて「ああ、それもいいな」「なるほど！」「そういう考えもあるんか」と視野を広げることが大切だと思います。

枚方サークルでは、2週間に1回（第2・4土曜日）の夜に、Zoomを使って教材分析をするなどの学習会をしています。毎回、「いろんな人の考えを聞くのは面白いな」「それいいな！いただき！」と思うことが必ずあり、自分の中に蓄積されていくのが楽しいです。さらに、疑問に思ったことを調べようと思ったり、文芸教育を読み直したり、次の学習への意欲も湧いてきます。今年は新型コロナウイルス感染症の影響で、みんなで集まることは難しく、寂しい感じもしますが、Zoomで普段交流できないような地域（青森県・徳島県・広島県など）の方と交流できるのは、自分にとって様々な考えを聞く良い機会になり、勉強になっています。ピンチをチャンスに変えて、さらに学びの幅が広がる可能性があるとワクワクしています。

野澤智子氏が育った庭で、バーベキュー



「ちゃんと もどってくるのかな」

広島サークル 吉田剛人

新様式，人と距離をとったり，マスクを着用したり，今は仕方ないですが，コロナが終息すると，その生活も終わりになるのでしょうか。それが心配です。そのままそれが常識にならないか。

まわりの人が風邪

例えば，今職場で風邪をひいている人がいます。これまでなら，「だいじょうぶ？早く帰りなさいよ！」と心配して温かく声をかけていました。ですが，今年は 近寄るまい。もしかしたら。早く帰ってほしいなあ，と心で思うようになってしまいました。これって私の常識が変わってしまったわけです。（もちろん，だいじょうぶ？って声はかけますけどね）

マスク

夏はしんどかったですね。マスク。あんなものいらん！って今までは思っていました。そして，真夏の暑いときには子どもたちとも，「マスクいやだねー」なんて話していました。夏が過ぎ秋。ある子が「先生，〇〇くんマスクしていないから，つけるよ

うに言うて！」と非難するような口調で訴えてきました。マスクをしていないⅡいけないこと、ルール違反なこと、私の健康・安全が脅かされること、というイメージに変わってしまったわけです。

給食・食事

給食時間ぐらい自由にお話ししながら食べたらいし、その方がおいしいし、楽しいし、と思っていました。本校では一応おしゃべりせずに食べるように決まっていたのですが、席も離れていることだし、まっいいかと思つて秋口まではそうしていました。しかし、第三波がやってきて、広島でも感染者が増えてきました。市内の学校でも感染者が出るようになり、いよいよ迫ってきました。だから、「もうおしゃべりなしにしよう」と子どもたちと相談して決めました。一週間ぐらい過ぎたとき子どもが「先生、楽しくないね」と言いました。「どうして？」と聞くと、「コツコツつてお箸とお皿の音しかしないじゃん。おしゃべりできないから。」と答えてくれました。人とかかわりを大切に思っているからでしょう。しかし今はそう思った子どもも、数か月が過ぎると、「給食時間におしゃべりして、コロナがうつたらいけないから止めさせてください。」と言ってくるかもしれません。

コロナで生活が変わり、生活が変わることで意識が変わつていつています。そして、コロナ前と比べ、制限されて嫌だなと思つていううちはよいのですが、制限されていることが普通になり、意識まで変わってしまったら：そう思うとんだか恐ろしくなります。なぜなら、コロナ対策は人と人とのつながりを割くものだからです。

これはコロナのせいかどうかは分かりませんが、かわりが：

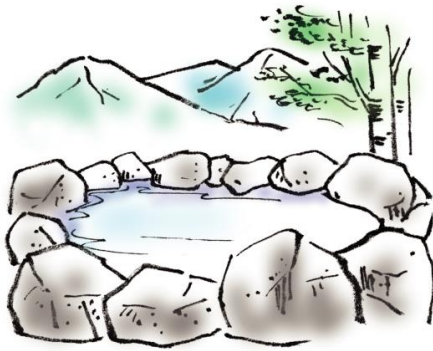
コロナ前、私はいつも班の形で学校生活を送らせていました。ですから友達が話を聞いていなかったらそつと教えてあげたり、算数で困っていたら助けてあげたり、いつもみんなで話し合つて学習を深めたり、隙間の時間には関係ないおしゃべりをしたり、微笑み合ったり：自然にそういうかかわりができていました。友達と友達の距離が近かつたわけです。

しかし、隣と席を離さないといけないというルールになつているので今は一人席です。すると例えば、隣の人が算数が分からなくて困つていても気にならないし、声もかけないんです。距離が離れていますから気付けられないのもあるでしょう。「隣の人を気にしてあげなさいよ」と言ったらできるのですが、言

わなかつたらしようとはしません。すぐにかかわり合いが消えていくのです。もしこれも新常識になつてしまったら、教えたり、教えられたり、助けたり助けられたり、支えたり支えられたり：おしゃべりして楽しいなつて感じたり、微笑み合つてほつとするな、そういう大切なものまで消えてしまうのではないか、そう思つてしまいます。

よし！もう終わり もとに戻そう は来るのかな

まずはマスクを外そう。そして大声で笑おう。思いつきりお話をして給食を食べよう。みんなで大きな声で歌おう。職員室でも大声で話をしよう。お店の人はレジの透明なカーテン外そう。みんなでお酒を飲みに行こう。ちゃんと戻つてくるのかな…。それを考えるとなんだから恐ろしくなつてしまいます。



こんな時だからこそ

山口東サークル 酒井 大輔

コロナウイルスに翻弄された今年も、もうすぐ終わろうとしています。こんな時だからこそ、変化に対応できる力や人間関係力などがより必要になるのだらうなと思います。できないことはたくさんありました。でもそれは慣例を見直すきっかけになりました。新しい方法を生み出すきっかけにもなったりもしました。何より、こんな中でも変わらない子供たちの笑顔や、工夫して遊ぼうとする子どもたちがとても元気をくれました。むしろ子どもの方が変化に柔軟に対応しているなとも思いました。

ZOOMを使ったオンライン学習会にも何度も参加させてもらいましたし、サークルもほとんどがオンラインでの学習会でした。場所を選ばず、様々な先生方の考えが学べるのは本当にありがたく、今年は例年以上に多くのことが学べたと思います。

今年は6年生担任で、先日「海のいのち」の学習が終わりしました。巨大なクエが育つためには数えきれないほどのものが関係していて、それらすべてがクエを育てていることなどにも認識を深めていました。そこから自分自身も、本当に多くのものに支

えられている存在であり、また多くのものを支えている存在であることにも、少しずつですが、気づいていました。

国語の授業もその他の授業も、その教材で子どもたちになにを学ばせたいか、子どもにどう学ばせたいかなどを教師が明確にもっていれば、子どもたちはどんな成長していくかと改めて思いました。しかし、このコロナ禍で、いつまた休校になるかわからないから授業をどんなに進めていつてほしいという声も聞こえます。メリハリのある授業は必要だと思いますが、教科書を終わらせることだけを目標にしてしまつてよいのだろうかと思えます。

コロナ禍になる前から、数多くの学習アプリが出ています。質の高い学習動画もあります。学習塾ではずいぶん前からDVDを使った人気講師の授業、サテライト授業などが取り入れられています。ただ教科書を終わらせるだけなら、それらの動画を見て学習アプリで学びを進めればよいという時代が来てしまうかもしれません。だからこそ私たちは、教科書をただ教えるのではなく、教科書でどんな人間観・世界観を子どもたちと一緒に考え、学んでいくのか考えていけないといけないのではないかと思っています。

「おてつちき 鹿児島おはら節」

かごしまサークル 林 三十四

謹んでご挨拶を申し上げます。

この度「おてつちき 鹿児島おはら節」を、刊行する運びになりました。

「かごしまふるさとカルタ」以来、郷土をあちこち巡る旅を今も続けております。七年の歳月で少しずつ書き溜めたものを、霧島市で二〇年以上発行を続ける情報誌に、毎月に一話（約四〇〇〇字）ずつ稿を寄せました。二年間の連載でした。

「鹿児島おはら節」との出会い、自分の幼少期の記憶に遡ります。

貧しく狭い家でしたが、何故か宴になる機会が多く、ご近所・顔見知りのおじさんお婆さんが集まつて焼酎を酌み交わしたり、なんこ遊びを始めたり、おはら節を歌い踊つたりしていました。布団に入り、大人たちの「酔狂」を耳にしながら寝入る日々……。おそらく、私という人間の形成に少なからずの影響を与えたことでありましょう。

「鹿児島おはら節」というローカルな歌ですが、突き詰めていくと、話題は列島からアジア全域・地

球の裏側とも密接に繋がっていきます。まさに、西郷先生から学んだ「一切即一切」の世界だと痛感します。また「民謡」という名の通り、歌詞のほとんどが民衆・市井の人々の姿や願いなわけですね。そこから「哀愁」「笑い」「哲学」「艶話」などを受信しておおいに楽しんで頂きますよう宜しくお願いします。

最後になりますが、時節柄くれぐれもご自愛ください。



歌詞に込められた思いに拍手喝采!

まさに題名通りの本である。
読者はおでっちぎ（思う存分）「鹿兒島おはら節」の世界を楽しむことができる。腹ん皮がよじ切るっこと痛快に感じるのは私だけではあるまい。

志學館大学教授・鹿兒島県文化協会会長 原口 泉

内容の紹介
おはら節のルーツ考／露島の茶の話／鹿兒島は石の街／学徒出陣／里山のパワー／川の話／とにかく夜は悩ましい／解釈をお願いします／薩摩の兵児さん事情／おごじょシリーズ／「桜島学」入門／明治前夜／薩摩の貴陽節／海防の古代史／蘇鉄の味噌／吉野狐／子守の唄／八景歌で何が・・・議論を言え／百姓遠遊／花はキリシマ／番外編 ちゃわんむしの歌／焼酎だいすき／愛を・・・囁きたい／げんねことしやんな／ひたむきな愛の物語／ちよつと艶話を

おでっちぎ 林 竜一郎 著

鹿兒島 おはら節

A5版／274頁
■ ISBN978-4-9910875-6-1
C-0039 ¥2000E

2020年
10月20日 発売
定価 2,000円 (税別)
国分進行堂 刊

★全国各地の書店でお求めいただけます
(お近くの方は出版元 国分進行堂店舗でも取り扱っております)

をかけ合い、知恵を出し合って一緒に運動を進めて行きたいと思っています。

★文芸教育、授業シリーズについての呼びかけ・販売をお願いします。学習会が組織しにくい中ですが、サークルでの学習や学校の同僚への紹介など、工夫して広げていきましょう。

全国大会がない中では、書籍、学習会が運動の柱になります。ぜひ、サークルでのご検討をお願いします。

★サークル会費納入お願い。まだお済みでないサークルは振り込みでの納入をお願いします。ご協力よろしくお願いします。